

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 347 号

—環境・農業・食べ物など情報の交流誌—

2013.03.08（金）発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の  
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

<http://www.yamazaki-i.org>

\*\*\*\*\*発行部数 1191 部\*\*\*\*\*

---

□ 目 次 □-----

<巻頭言> しいたけ生産者・飯泉孝司さんの想い 塩谷哲夫

<山崎農業研究所 第 144 回定例（現地）研究会 速報（要旨）>

テーマ：果樹王国ふくしま：産地再生に向けて

2. ワークショップ解題 (2)放射性物質：汚染・除染の考え方

.....渡邊博氏 山崎農研

<編集後記> あたり前の世界に未来がある

——中島紀一著『有機農業の技術とは何か

—土に学び、実践者とともに』（農文協刊）

---

<巻頭言> しいたけ生産者・飯泉孝司さんの想い

---

茨城県つくば市谷田部に年間 20 万本以上ものコナラやクヌギの原木を使って  
しいたけ生産をしてきた東日本最大の『なかのきのこ園』がある。社長の飯泉  
孝司さんのシイタケ栽培は、43 年前の原木 1500 本から始まった。

重い原木の運搬、水漬け、きのこ発生ハウスへの種菌接種原木のセッティン  
グ.....などの作業を効率よく進める工夫をし、ビニールハウス内の温湿度管理  
などの技術革新を図り、環境と菌の発芽・きのこ生育との関係の研究などに取り  
組んだ。

そうして、「むかしながらの原木栽培」にこだわって、無農薬・無添加で生  
しいたけ 170 トン、乾しいたけ 1 トンを生産するまでに経営を発展させた。

きのこ類はもともと森の恵である。しいたけ栽培には直径 7～15cm 程度のク  
ヌギやコナラの幹や枝を使う。それは樹の株本体を切り倒すわけではないので、

15～20年サイクルで再生させて利用できる。薪炭の原木も同様である。この人工の森は模範的な自然資源循環利用のモデルであった。しかし、今では、「トロの森」のように郷愁を誘ってビオトープとなっているところはあるけれども、現実には、その多くが管理する人も無く荒れ放題となっている。

なかのきのこ園では福島県南の阿武隈山地の雑木山の原木を使っていた。7人ほどの山主さんたちは昔ながらに（今では“最も未来的”に）管理を怠らずに森を維持してくれていた。そのことが彼等の林業経営の支えにもなってきた。

ところが、2011年3月11日、里山に、きのこ園に激震が走った。福島第一原発が爆発し、大量の放射性物質を森に、人里に、原木貯留場に、降り注いだ。

きのこ類はセシウムを吸収しやすい特性がある。しいたけはたちまちにして放射能に汚染され、出荷停止となってしまった。原木も使えなくなった。事態は放牧や牧草利用の畜産や落ち葉利用の有機栽培にとっても同様で、農業経営をやっていけなくなった...いや、やっていけなくされてしまったのである。汚染された地域の人々は故郷に住むこともできなくされた。

その後、飯泉さんは西日本から原木を取り寄せたが、とても採算が取れなかった。現在は、高圧の洗浄機を導入し、原木の除染に努めているが、15～30ベクレル/kgのセシウムの検出があり苦闘している。

昨年10月、飯泉さんは「里山再生会議」を立ち上げ、国会、農林水産省や東京電力と交渉しながら、原木生産のためのナラやクヌギを植樹することを、故郷の野山の環境を保全し、自然資源の循環利用とを結びつけた“里山再生”を呼びかけている。

塩谷哲夫

山崎農業研究所幹事、東京農工大学名誉教授

[yamazaki@yamazaki-i.org](mailto:yamazaki@yamazaki-i.org)

---

<山崎農業研究所 第144回定例（現地）研究会 速報（要旨）>

テーマ：果樹王国ふくしま：産地再生に向けて

期 日：2013年1月19日（土）

場 所：JA新ふくしま飯坂南支所 会議室

1. 基調報告 ベラルーシ現地視察を踏まえて  
.....今野文治氏 JA 新ふくしま農業振興対策室
  2. ワークショップ解題＝山崎農研
    - (1)住民参加型復旧・復興の方法.....小泉浩郎氏
    - (2)放射性物質：汚染・除染の考え方.....渡邊博氏
    - (3)産地再興：歴史に学ぶ.....石川秀勇氏
    - (4)風評被害：そのメカニズムと対策.....家常高氏
- 

2. ワークショップ解題 (2)放射性物質：汚染・除染の考え方  
.....渡邊博氏 山崎農研

今まで水田除塩の実験をしてきた。また原発被害地の調査もした。放射被害のデータは分からないことが多い。放射線量の一時的な変動から言うのではなく、長期的な見方をしないといけない。チェルノブイリ原発事故での飛散濃度は10倍大きい、植物によって吸収の様態が異なるので、わが国での作物への汚染について簡単に比較できない。

農作物の場合、葉など表面に付着し気孔から吸収されるものと、土壌より根から吸収されるものに大別される。セシウム (Sc) の吸収による水田でのコメでの被害は、土壌中にカリ (k) 分の少ないときに大きい。園地の茶では根からではなく葉から吸収されている。キノコは腐植質を通して吸収する傾向にある。

土壌汚染の対策として、表土の剥ぎ取りは望ましくない。表土は農地の最も大切な部分であり、長年の土壌作りで作られる。剥ぎ取りでは、処理土の扱いも難しい。汚染濃度の比較的低い場合になるが、表土を剥ぐのではなく、すき込み (反転耕) するのが良い。放射能物質を吸収する植物としては、芝や牧草で高い数値が報告されており、これらの利用による除去対策も考える。

環境と農作物の検査・モニタリングを行政まかせにせず、自ら携わるようにし、風評に惑わされない対策を進める必要がある。

(文責：石川・安富)

---

<編集後記> あたり前の世界に未来がある  
——中島紀一著『有機農業の技術とは何か

有機農業という言葉が市民権を得てからもう何年になるだろうか。だが、たとえば生産量でみると農産物全体の0.5パーセントにも満たないのが現状である。

この点だけをみれば、有機農業はまだまだ特殊な存在である。しかし、その有機農業を特殊な存在ではなく、あたり前の農のあり方とし、そのあたり前さを支えるのが土であり、微生物であり、地域の多様な自然(生態系)であると捉えるが、本書の基本スタンスである。

「[筆者がさまざまな研究者・実践者から学んだのは] 作物も家畜もその体内に実に多くの微生物を抱えており、それ自体が微生物共生体として存在していること、そして、その身体の表面やその周辺にも、体内の微生物群と密接につながった微生物群が多様な群集として生きており、その微生物(主としてバクテリアやカビや小動物)は相互に関係をもつ生態系を形成していること、それらの微生物群集の主な活動の場は、さまざまな動植物も生きる土だということであった。……農耕における土の本源性の重要な根拠は、実は土こそ微生物を主軸としてさまざまな生きものたちの共生の場であり、土はそれ自体が微生物等の共生体だという点に求められる。」

こうした認識とともにある有機農業の実践は自然共生型の社会、震災後真剣に考えられつつある脱原発社会、脱成長社会に対しても確かな視点を提供する。

「有機農業の農業実践においては、外部資材等の投入削減が、圃場生態系や地域自然との良好な関係性の形成を促し、環境浄化・自然共生の線上での本来的生産力の向上が図られるという真に注目すべき世界が作られ始めている。……このような圃場生態系の活性化は環境論的には浄化プロセスであるが、それが同時に生産プロセスとしても機能し、さらには二次的な自然形成のプロセスともなっているのである。」

原発事故後の福島において農家の希望となったのは土を耕し作物をつくるということであった。土は放射性セシウムを吸着し、そのことにより作物への移行がわずかで済み、また耕された土はガンマ線を遮蔽してくれている。

価値観が変わり、社会が変わるうえで新しい思想や科学が大きな役割を果たすことはいままでもない。だが、それ以上に／それ以前に、“普遍的に存在す

る土の世界”によって私たちはこれまで支えられてきたしこれからもそうであること、そのことの意味を深く認識する必要があるのではないか。あたり前の世界に未来がある、そのことを本書は静かにそして力強く語っている。

中島紀一著

『有機農業の技術とは何か—土に学び、実践者とともに』

(シリーズ地域の再生 20)

農文協刊、四六判 272 ページ

定価：2,730 円 (税込)

ISBN：9784540092336

発行日：2013/02

[http://shop.ruralnet.or.jp/b\\_no=01\\_54009233/](http://shop.ruralnet.or.jp/b_no=01_54009233/)

2013 年 03 月 09 日

山崎農業研究所会員・田口 均

[yamazaki@yamazaki-i.org](mailto:yamazaki@yamazaki-i.org)

---

山崎農業研究所編・発行／農山漁村文化協会発売

『自給再考—グローバリゼーションの次は何か』

(発売：2008/11 定価：1,575 円 )

[http://shop.ruralnet.or.jp/b\\_no=01\\_4540082955/](http://shop.ruralnet.or.jp/b_no=01_4540082955/)

たくさんの書評・紹介記事をいただいています。感謝・感謝です。

---

◎辻信一さん (文化人類学者、ナマケモノ倶楽部世話人。明治学院大学教授)

グローバルの次は何? ~卒業するゼミ生諸君へ

<http://www.sloth.gr.jp/tsuji/library/column64.html>

◎戒谷徹也さん (大地を守る会)

ブログ：大地を守る会のエビちゃん日記 “あんしんはしんどい”

「自給率」の前に、「自給」の意味を

<http://www.daichi.or.jp/blog/ebichan/2008/12/16/>

◎吉田太郎さん (長野県農業大学校教授、執筆者)

キューバ有機農業ブログ 自給再考の本が出ました

[http://pub.ne.jp/cubaorganic/?entry\\_id=1822182](http://pub.ne.jp/cubaorganic/?entry_id=1822182)

◎関良基さん (拓殖大学政経学部)

ブログ：代替案 書評：『自給再考—グローバリゼーションの次は何か』

<http://blog.goo.ne.jp/reforestation/e/cb22650fa39384bdd22b61440fa81fa0>

◎大内正伸さん（イラストレーター・ライター）

ブログ：神流アトリエ日記（3）「書評『自給再考』」

<http://sun.ap.teacup.com/applet/tamarin/20081204/archive>

◎ブログ：本に溺れたい グローバリゼーションの次は何か

<http://renqing.cocolog-nifty.com/bookjunkie/2009/01/post-841e.html>

◎森川辰夫さん

NPO 法人 農と人とくらし研究センター／資料情報

<http://www.rircl.jp/shiryō.htm>

◎日本農業新聞／書評

（2009/01/19 評者：日本農業新聞編集委員 山田優）

<http://yamazaki-i.org/>

（画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい）

◎小谷敏さん（大妻女子大学）

日本海新聞コラム「潮流」／「自給」の方へ（2009/01/31）

<http://blog.goo.ne.jp/binbin1956/e/c895f6619b30ba7725e264b4daa75219>

◎白崎一裕さん（(株) 共に生きるために）

月刊とちぎV ネットボランティア情報 vol.158／しみん文庫

<http://yamazaki-i.org/>

（画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい）

◎塩見直紀さん（半農半X 研究所、執筆者）

ブログ：半農半Xという生き方～スローレボリューションでいこう！

立国集。

<http://plaza.rakuten.co.jp/simpleandmission/diary/200812270000/>

---

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

---

1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。

2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。

3、1回1テーマ、10行位に。

4、ホームページを持っている人は、文末にURLを。

5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化

けの原因です。

-----  
次回 348 号の締め切りは 03 月 18 日、発行は 03 月 21 日の予定です。

-----  
<本誌記事の無断転載を禁じます>

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 347 号

最新号・バックナンバーの閲覧

<http://archive.mag2.com/0000014872/index.html>

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

購読申し込み／解除案内

<http://www.yamazaki-i.org>

2013.03.08（金）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:yamazaki@yamazaki-i.org>

\*\*\*\*\* ここまで『電子耕』 \*\*\*\*\*